

沖縄と福建における亀甲墓の対比

——外部意匠の比較を中心として——

Comparative Study of External Ornaments and Other Aspects of Turtleback Tombs
in Okinawa and Fujian

小熊 誠

OGUMA Makoto

要 旨

沖縄の亀甲墓は、近世福建の亀甲墓の墓型が導入されて成立したことは従来指摘されてきた。また、そういう経緯があるにもかかわらず、沖縄の亀甲墓は福建の亀甲墓とまったく同じではなく、異なる点があることも指摘されてきた。しかしながら、具体的な墓の構造や意匠などに注目して、両者を比較する研究は多くはなかった。それを本格的に行ったのは、平敷令治であった。その研究を基本として、ウーシ（臼）といわれる琉球・沖縄の亀甲墓の特徴がどのように創造されたのかを再検討する。

まず、琉球家譜に描かれた近世福州における亀甲墓と福州で実地調査した墓調査資料をもとに、福州における亀甲墓の歴史的展開とその特徴を亀甲墓に施された石獅子や仙桃、螺古などの意匠を中心に考察する。次に、近世琉球における亀甲墓について、写真や墓図をもとに、琉球士族、有力村役人層である久米島上江洲家の事例を整理する。さらに近代以降の亀甲墓について、津堅島の事例を検討する。そこから、ウーシがいつから、どの墓につけられるようになり、どのように展開したかを分析する。

福州における亀甲墓の歴史的展開と琉球・沖縄における亀甲墓の歴史的展開を対比することによって、ウーシは福州の意匠の影響ではなく、むしろ琉球第二尚氏王家の王墓である玉陵の円筒の影響があることを類推する。また、福州では中国的な風水や富貴願望の慣習から亀甲墓の意匠が展開したことを示す。

本稿の新しい方法論として、福州における歴史的展開と琉球・沖縄における歴史的展開を対比するという時間軸と空間軸と組み合わせた立体的な比較研究を提示した。そして、福建と琉球・沖縄の亀甲墓は、コンバージェンス（収斂）だとした平敷令治の指摘に対して、本稿では福州の石獅子などの意匠と琉球・沖縄のウーシという意匠の具体的な物質文化の対比によって、その意味とその違いを検討した。

【キーワード】 亀甲墓、ウーシ、琉球人墓園、墓風水、立体的比較研究

1. はじめに

現代沖縄における墓は、大きく分けても破風墓、亀甲墓、家墓などさまざまな形態のものが存在

する⁽¹⁾。その形態の発生について、大まかにみると、古琉球の時代である 1501 年に造営された第二尚氏王墓である玉陵は破風墓の形態であり、亀甲墓は中国から風水思想が導入され始めた近世の 17 世紀後半から沖縄で広まり、家墓は戦後コンクリート製の墓が作られるようになって普及した。これらの形態は、たとえば石油ランプから電燈に変化するというような科学技術の普及と衰退によって変遷をしたのではなく、その形態が発生してから現在に至るまで使用され続けている。現代の沖縄でも新しく造営される墓には、破風墓も亀甲墓も家墓もあるという多様な墓形態があることが沖縄の墓の一つの特徴である。

その中で、亀甲墓の形態は中国福建から近世の琉球に導入されたことは、多くの研究者によって指摘されている〔小川 1968、平敷 1995〕。しかし、亀甲墓に分類されたとしても、近世の亀甲墓、近代の亀甲墓そして現代の亀甲墓というように造営の年代に変化があるだろうし、造営者の社会的地位や経済的状況によっても細かく見ればその形態に違いがある。亀甲墓の形態は近世に導入されて、300 年あまりの間琉球・沖縄で普及してきた。その時間軸の中における墓形態の変遷を考察したのは、前田一舟の「墓の型式とその変遷—沖縄本島中部・屋慶名の事例—」である〔前田 2011〕。この論考は、沖縄中部の一地域における墓形態を悉皆調査し、それぞれの形態ごとに時系列的に配置してその歴史的変遷を整理した。本論では、中国から導入された亀甲墓に限定し、かつ沖縄本島および周辺離島の範囲において、亀甲墓の形態が近世の導入当初から現代に至る間にどのように変化したかという歴史的な変遷を整理することを第一の視点としたい。ただし、本稿では墓口上部の左右につけられるウーシ（臼）という意匠に注目したい。

琉球・沖縄における墓形態の研究は、当然のことながらその地域内での偏差や変遷を指標にしながらかその分類などの研究が進められてきた。そして、亀甲墓については、中国から導入された墓形態であることは古くから指摘されてきた。前稿（国際常民文化研究機構の『国際シンポジウム報告書Ⅱ』に掲載）で指摘したように、柳田国男も、「葬制の沿革について」（1929 年）において、亀甲墓の外形が中国の影響を受けていることは言及している。ただし、亀甲墓の外形が沖縄の墓の本質ではなく、それが「一族門党」で使用されることに沖縄の墓の構造的特徴があると看破した点は〔小熊 2011：61〕、沖縄文化の主体性を念頭に置いた主張であった。

この点をふまえて歴史的視点から亀甲墓の形態の変遷を考察する際、琉球・沖縄の葬制あるいは習俗の影響を受けつつ、亀甲墓の形態も沖縄的な亀甲墓へ変化していったことが考えられる。それを検討するには、福建の亀甲墓と沖縄の亀甲墓の形態的相違を比較する必要がある。これが、第 2 の視点である。考古学者の中村愿は、福建で見た亀甲墓と沖縄の亀甲墓は入り口が異なるなど、その形態の相違について指摘している〔沖縄県地域史協議会編 1989：77-78〕。日中の比較の視点から本格的に亀甲墓の比較研究を行ったのは、平敷令治である〔平敷 1995：390〕。墓の構造を、内部構造と外部構造に分けて考えてみると、従来福建の亀甲墓に比べて琉球・沖縄の亀甲墓は墓壇が大きいなどの内部構造の比較研究は比較的行われてきた。しかし、外部構造、とくに亀甲墓の外部に施された意匠についての福建と琉球・沖縄の比較研究は、従来あまり見ることはなく、これも平敷令治が先鞭をつけた。平敷は、近世士族の亀甲墓に限定されたウーシという意匠に注目した。この意匠を、台湾の亀甲墓と対比することによって、中国の官人層に使用された閩粵系の墓の石筆柱、あるいは石印柱に対応すると述べている〔平敷 1995：388-389〕。

しかし、沖縄の亀甲墓の意匠であるウーシはただの円柱であり、その置かれる場所は墓口前面のマユ（眉）と呼ばれる庇状の構造物の左右である。円柱の大きさも、直径 50 センチメートルほど、高さ 50 センチメートルほどもある大きな意匠である。それに対して、福建・台湾系の亀甲墓に置かれる意匠は、石獅子や石象あるいは仙桃や睡蓮などの吉祥物を象り、墓囲いの石柱の上に置

かれている。大きさもさほど大きくはない。この両者を対比して見ても、福建の意匠が導入されて沖縄のウーシになったとは考え難い。平敷も、沖縄のウーシは閩粵系の石筆柱に「対応する」と述べているだけで、ウーシが福建から沖縄に導入されたとは述べていない。

沖縄における亀甲墓のウーシは、沖縄独特の意匠であると考えられることができるが、それはどのように沖縄の亀甲墓につけられるようになり、その意味は何であるのかを考察する際、近世琉球に亀甲墓が導入された時点における福建と琉球の亀甲墓の比較を行ない、その相違を確認する必要がある。その後、ウーシに着目しながら琉球・沖縄の亀甲墓の展開を検討し、福建における亀甲墓の現代的な展開と対比することにより、沖縄的な亀甲墓とは何かを考察したい。

つまり本稿は、琉球・沖縄の亀甲墓の形態と福建・台湾の亀甲墓の形態を対比した平敷令治の論考を基本にしつつ、拙稿の続編という位置づけである。単に時代を分けずに福建・台湾と琉球・沖縄における亀甲墓を対比するのではなく、近世から現代における亀甲墓の展開を考慮に入れて、両地域における亀甲墓の特徴を比較してみたい。すなわち、時代による亀甲墓の変遷を見る第1の視点と福建と琉球・沖縄の地域間の比較を行なう第2の視点を組み合わせた時間軸と空間軸を組み合わせた立体的な比較研究を行なうことが本稿の最終的な目的である。

2. 福州における亀甲墓

1) 中国の琉球人墓

中国には、多くの琉球人の墓が残されている。琉球は、明の洪武五年（1372）から清の光緒五年（1879）までの約500年間にわたり、朝貢冊封関係を結んで中国との外交交流関係を継続してきた。中国からは、琉球王の交代などに際して、冊封使が御冠船に乗って来琉した。琉球からは、進貢使などの役人や留学生、船乗りなど毎回約100人から300人もの琉球人が、進貢船に乗って海を渡り、福州に⁽²⁾行った。そこから、陸路北京に行くこともあった。中国への渡海は、政治的な外交関係だけでなく経済的な交易関係も含んでおり、500年間の進貢回数は、のべ241回にものぼるといわれる。その間、琉球から中国に渡った人数は、のべ20万人を超えるとも言われ〔高良1986：161〕、それほど多くの琉球人が命をかけて中国に渡り、そしてそこで亡くなった人もたくさんいたということになる。

中国における琉球人の墓を研究した歴史学者に、福建師範大学の徐恭生教授がいる。徐教授は、中国と琉球の交流史の一環として琉球人墓の研究を位置付けている。琉球人墓は、琉球人が活動した場所に多く存在する。それを、徐教授は4つに分類している〔徐1991：83-97〕。1つは、福州である。福州市街に琉球の領事館ともいべき琉球館があった。琉球館には、毎年琉球人が百人ほど暮らしていたという。そこで病気などで亡くなる人がいると、福州城東門外の新山や福州旧市街の南を流れる閩江を渡った倉山白泉庵などに葬られた。倉山白泉庵は、福建師範大学旧キャンパスの裏手にあり、1963年に福建師範大学歴史系の教員たちが調査した際には、66基の琉球人墓があったという。それが文革で破壊され、現在残っている墓は12基で、そのうち7基が琉球人墓園（写真1）に残されている。

2つ目は、北京である。北京に滞在した琉球国使臣や随行員、官生（国費留学生）などは、国子監（写真2）に逗留した。北京で亡くなった琉球人は、雍正三年（1725）到北京郊外通州の張家湾に皇帝の命によって建造された琉球国墓地などに埋葬された。しかし、現在ここに石碑は残っているが、琉球人の墓は残されていないという。

3つ目は、福州から北京に到る道沿いである。福州から北京まで、現在の列車でも2000キロを



写真 1 福州の琉球人墓園



写真 2 皇帝が講義した国子監の中心的建物辟雍

超える。その行程を、かつては陸路と運河を使って移動した、過酷な旅であった。1992年の「中国大陆 3000 キロ踏査行」に参加して、著者も福建におけるその一部を歩いたことがある。いくつもの山を越えて歩く、きつい旅だった。かつては、途中で客死した琉球人も数多くいた。身分のある使臣の場合は、霊柩を琉球に送り帰したり、福州で埋葬したりすることもあったが、随行員の場合は客死したその地に埋葬されるのが原則であったという〔徐 1991：91〕。したがって、福州から北京への沿道にも琉球人墓が数多くあった。

4つ目は、中国東南沿海地域である。それは、琉球船が暴風などに遭って漂流したり、座礁したりして、そこで犠牲者が出た記録が多く存在する。そして、犠牲者をその地に葬った琉球人墓が、福建だけでなく、浙江、広東、山東、台湾などに存在しているという〔徐 1991：97〕。

このように、中国には近世以前の琉球人墓が多数存在していた。しかし、文革や開発などでその多くは破壊されている可能性もある。残された墓の遺物としては、墓そのものと墓碑がある。墓は残されていないが、墓碑が残されている場合も多くある。本稿では、墓の形態を知るために、残された墓を調べる必要がある。北方の墓は、その地域と同じ土饅頭の形態である。したがって、上記のさまざまな琉球人墓の中から、福建に残された墓に限定する必要がある。以上から、本稿では近世の亀甲墓としては、福州倉山地区にある琉球人墓園の墓を主な対象とする。

2) 福州倉山地区の琉球人墓園

琉球人墓園には、現在 7 基の琉球人墓が保存されている。乾隆四年（1739）没の「首里府官舎益広業仲座筑登之親雲上の墓」から、道光十六年（1836）没の「小唐船脇吾主夏善述新垣筑登之の墓」まで、約 100 年間に亡くなった琉球人の墓である。7 基のうち 2 基は、福建郵電学校内にあったものを、1988 年に琉球人墓園に移築したものである。

これらの墓碑には、琉球人の氏名（琉球式の名、字、位階、名前。その他に唐名が併記される場合も多い）の他に、没年月日（中国年代）が書かれ、さらに墓地の縦長と横幅が書かれる場合がある。墓地の大きさが墓碑に刻まれるのは、その成立と関係する。つまり、現地の地主から墓地を買い上げ、そこに墓を造営することになる。徐恭生教授は、琉球家譜を調査して、そこから福州における多くの墓地売買の契約書記録を発見した。たとえば、「曾姓家譜」に掲載されている墓地売買契約書を紹介している。乾隆十九年（1754）の契約書で、閩県にある土地の場所、「長サ三丈三尺、闊サ二丈」という土地の広さなどが記され、最後に地主、仲介人、代書の氏名が記されている〔徐 1991：53-55〕。

また、墓地の領域を明確に墓碑に記すことは、琉球人墓が現地の福建人の墓と混在するために、

墓地の土地を侵食されたり、壊されたりしないようにするためだとも言われる。さらに、墓地の広さは、被葬者の身分に関連していたという。その例として、進貢使阮廷宝の墓は、縦二丈八尺、横二丈一尺である。メートル法に直すと、縦9.24メートル、横6.93メートルで、約64平方メートル(19.4坪)もの大きさがあった。同じように、通事金明道の墓は、縦二丈三尺、横一丈四尺であるから、縦7.59メートル、縦4.62メートル、広さ約35平方メートル(10.6坪)。留学生得程の墓は、縦一丈七尺、横一丈二尺、縦5.61メートル、横3.96メートル、広さ約22.2平方メートル(6.7坪)。水手大嶺親雲上の墓は、縦一丈四尺、横一丈、縦4.62メートル、横3.3メートル、広さ約15.2平方メートル(4.6坪)である〔徐 1991: 56〕。進貢使と水手の墓の大きさは、広さにして4倍強の違いがあった。



写真3 琉球人墓園の墓

さて、福州における琉球人の墓は、その形状は当地の民間の墓に似ていると言われている。似ているというよりは、ほぼ同じ形状ではないかと思われる。琉球人墓園の墓をみると、写真3のようになっている。墓の真ん中に「亀甲」のような細長い半円柱状の形状があり、その下に遺骸の入った棺が収められている。その前面に墓碑が立っている。半円柱の外側に馬蹄形の囲いがある。その外囲いの左右の端の下に、肘掛状のものが伸びており、それを地元では「如意擺手」(ゆったり手をのせる)という。この墓の形は、遠くから見ると「公座椅」(役人の公務をとる椅子)に見えるという〔徐 1991: 56〕。当時の役人は、科挙合格者であり、この公座椅の形状をもつ墓は学問成就と出世に関連した縁起のいい墓の形状だと考えられていたと思われる。さらに、墓の前に庭を形成するために庭囲いが左右にめぐらされている。

福建で客死した祖先の墓の情報が、琉球家譜にいくつか載せられている。嘉慶六年(1801)に福建で造営された久米村系の鄭氏十五世得功の墓(図1)を見ると、写真3の墓と形状はほぼ同じである。徐恭生教授は、「この形の墓が琉球に伝わって“亀甲墓”と呼ばれて」と述べている〔徐 1991: 57〕。この墓型が福建から琉球に伝わったことはほぼ間違いな事で、琉球に導入後それが墓制や葬制の影響を受けて琉球・沖縄的に変化していったことは、すでに述べられている〔平敷 1995、小熊 2011〕。本稿でも、次章でこの点を検討する。

本稿で新たに注目したいのは、墓の外側に

図1 鄭氏十五世得功の墓図
〔那覇市企画部市史編集室 1980: 639〕

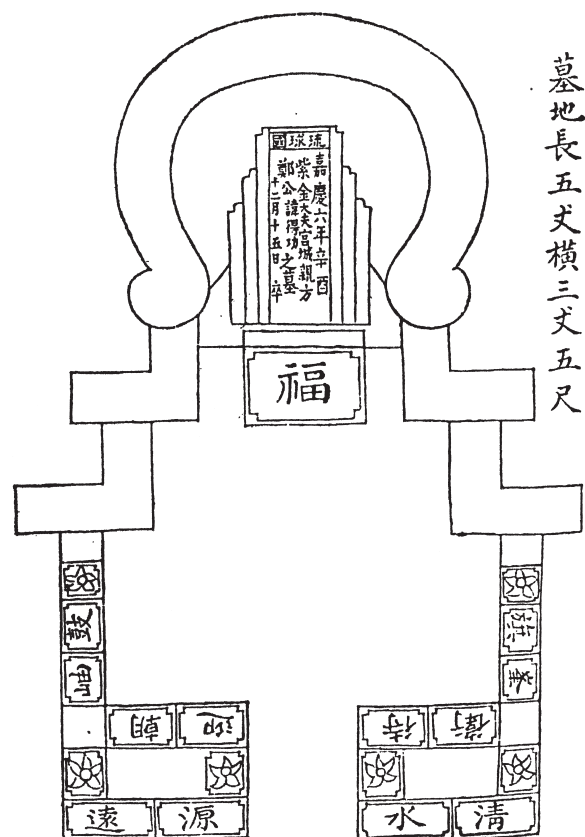


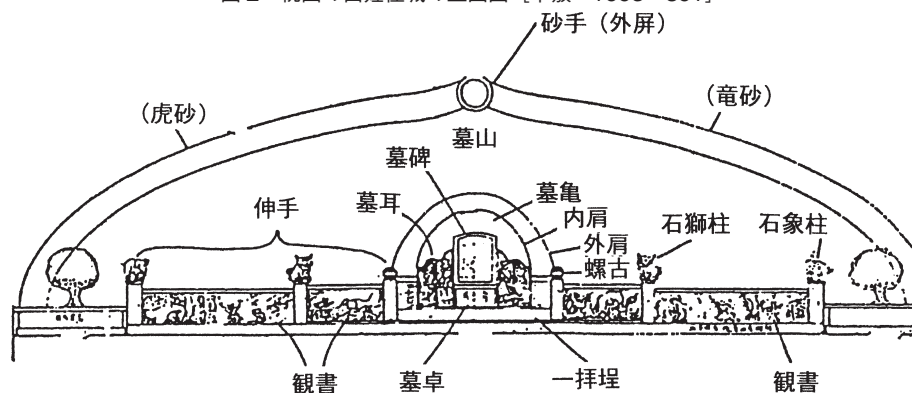


写真 4-1 螺古をもつ墓（福州高蓋山）



写真 4-2 螺古

図 2 桃園の呂姓佳城の正面図 [平敷 1995 : 391]



施された意匠の問題である。図 1 を見ると、馬蹄形状の外囲みの左右の端は、ただの丸ではなく、丸みを帯びた蕨紋のような装飾形をしている。福建・台湾系の墓では、その上に巻貝のような「螺古」といわれる立体的な渦巻きが施されることがある（写真 4-1 と 4-2）。これは、平敷令治の調査した台湾・桃園の呂姓佳城の平面図にも示されている（図 2）。さらに、墓前の碑の左右から肘掛のように前に伸びる「如意擺手」の部分の角、あるいは先端部に石印柱とか、石筆柱、石象、石獅子などが乗せられる。平敷の参照した台湾の墓は、現在の墓である。近世における福建の墓にも、このような意匠が施されていたのであろうか。

琉球への最後の冊封使であった趙新（1809～1876 年）の墓が、福州市倉山区洪山橋下店の丘の上にある⁽³⁾。墓碑によると、光緒己卯の年、つまり

清末の 1879 年に造営された墓である。山を背にして、左右は龍脈に囲まれ、前面は閩江が流れて広々として、遠く山の連なりを望むことができ、風水立地の良いところにある。趙新は官人であったので、その墓の規模は大きい（写真 5）。長さは 10 メートルをゆうに超え、幅も 10 メートル前後はある。山の斜面に立地しており、墓前の庭が斜面に 5 段並んだ構造になっている。しかし、今では誰も管理していないのか、草に覆われており、その石積みは所々崩れて、残念ながら清朝官僚の立派だった墓



写真 5 趙新墓の 3 段目から上を見る



写真6 趙新墓の石獅子



写真7 趙新墓の装飾

地の姿は今に留めていない。

この近世の墓をみると、墓碑から左右に伸びている袖囲いの端に石獅子が置かれている（写真6）。向かって右側の石獅子は、上半分が壊されて無くなっているが、確かに左右に石獅子が置かれている。そして、墓庭を囲む庭囲いが5段あって、その結節点にある石柱にも装飾が見られる。一つは、円柱に見えるが（写真7）、表面に螺旋状の線がかすかに見えるので、螺古だったかもしれない。もう一つは、草の弦に覆われているが、花卉のような形が見えるので、睡蓮かもしれない。

このように、墓の意匠に注目すると、琉球家譜に書かれた墓の図からは、外囲いの周縁部が丸みを帯びている点と、墓碑の左右から前に出る肘掛状の部分がLの字状に何重かになっている部分がわかる。趙新の墓も、同じような外形の構造になっており、その端や角に石獅子や円柱状の装飾を施していることがわかった。この装飾が、福建、台湾における現代の墓ではどのような展開をしているのだろうか。

3) 現代における福州の亀甲墓

2012年2月28日から3月4日まで、福建省福州市およびその周辺で墓調査を行った。

まず、福州から閩江に沿って北西に16キロメートルほど遡った郊外に位置する閩侯県徐家村周辺で調査を行った。墓職人である、徐本棟氏（1948年生、調査当時65歳）に現地でご教示いただいた。

徐本棟氏は、14歳から墓職人の仕事を始め、現在でも現役で50年ほどの経験を持っている。墓造りを請け負うと、まず風水師と一緒に墓造営の場所を探しに行く。①墓の背にあたる龍脈の善し悪しを見る。②墓の向いに見える山の形状を見る。向かいの山が、面々と幾重にも連なっているのが良い。③気の集まる場所を探す。山の中腹は、あまり良くない。山の麓が良い。また、水の気が入ってきて、それを保つような場所が良い。水の気は、財と関連するので、財が入ってくるような場所が良い。こうして、大まかな場所は、墓職人である自分が探して、その場所の詳しい位置や方向などは、風水師が決める。

徐本棟氏が2006年に造営した墓（写真8）は、その場所の選定に時間がかかった。埋葬する死者の頭が安定するような背山



写真8 徐家村の亀甲墓



写真 9 墓前面の山々と墓頂部の亀甲

が必要である。また、風をあまり受けない場所がいい。この墓の中軸線を引くと、その向かいには3層の山が重なって連なり、いい場所である。向かいの山は遠ければ遠いほどよい。

この墓は、斜面から墓坑の部分の土を掘り出し、中に遺骨を入れる3つの小さな部屋を作っている。部屋と部屋の間には溝があって水を排出する構造になっている。その上に土をかぶせ、上部はタイルで亀甲の形を作っている（写真9）。墓口は、龍が筆を持った彫刻の石をはめており、その上1メートルほど上部に墓碑をはめ込んでいる。墓碑の上に屋根のついた石龍亭を乗せている。これは、構造上難しかった。これを乗せる墓は、金持ちの墓である。



写真 10 墓碑前面の石獅子

墓の本体である亀甲の部分の外縁部を、3重に囲っている。さらにその囲いの形は、馬蹄型の半円が上部から左右に下って来て、波のように3つの曲線が繋がっている。それぞれの曲線の先端部は、丸みを帯びているので、内側に突起が出る形になっている。この外囲いの形は、乾隆年間に福州で客死した久米村系蔡氏十二世其棟の墓図（図3）⁽⁴⁾と同じである。したがって、外囲いをこのように曲線で繋げる形状は、福州では近世からあったことがわかる。また、墓の前面に立てられた墓碑の前に棚が置かれ、それを囲むように左右に



写真 11 仙桃



写真 12 睡蓮



写真 13 石象



写真 14 八角竹



写真 15 鼓

壁が出ている。その先端部と墓庭を囲む囲いの結節点の左右に石柱が置かれ、その上に石獅子が置かれている（写真 10）。これは、趙新の墓とまったく同じである。さらに、墓口から前面の墓庭を囲む高さ 1 メートルほどの壁がクランク状に 3 段になって入口に広がっている。その壁の末端部の角には石柱が立てられ、その上に仙桃（写真 11）、睡蓮（写真 12）の飾りがついている。石獅子は避邪の意味で、仙桃と睡蓮は富貴の意味だと思われる。また、この墓の囲いが左右に伸びており、その先端には象の飾り（写真 13）が乗せられている。これも、避邪の意味かと思われる。この墓の向かいには、幅約 6 メートル、高さ約 1 メートルの壁があり、左右の端と中に 2 本、合計 4 本の石柱がある。この壁は、風水から見ると、前面から来る悪い気を防ぐ照壁の意味がある。その石柱の上には、八角竹（写真 14）と鼓（写真 15）の装飾がある。これも避邪の意味をもつと考えられる。

これらの装飾にはそれぞれ意味があるが、その整理の前にもう 2 か所の墓地資料を提示する。1 か所目は、高蓋山である。福州の旧市街の南に、東から西に向けて閩江が流れている。その南が倉山地区で、そのさらに南に高蓋山がある。海拔 202 メートルの山で、そこは高蓋山公園となっており、緑豊かで山登りの道が整備されている。そこは、近世から周囲の人々の墓地地帯でもある。琉球人墓も、発見されている〔徐 1991：127〕。現在も、新旧多くの墓がこの山に点在している。

その一つに、光緒乙未、つまり光緒二十一年（1895）の墓碑のある墓がある（写真 16）。この墓碑の前面にある石柱に、睡蓮のような装飾が見られる。また、民国廿五（1936）年の墓碑がある墓には、球状の装飾がある（写真 17）。これは、仙桃の意味があると思われる。そのほか、近年に造営された墓もたくさんある。それらには、石獅子を始め睡蓮や八角竹などの装飾を見ることができる（写真 18）。また、1980 年代に造られた墓の墓庭の外囲いの先端に螺古の装飾が付けられている（写真 19-1、19-2）。

もう 1 か所は、現在数多くつくられている共同墓園である（写真 20）。その墓は、ほとんどが 2000 年以降に造られている。共同墓園の新しい墓は、面積が限られているので、伝統的な亀甲墓のように造ることは不可能である。しかし、伝統的な墓のイメージを小さな新型の墓に表そうとしているように見える。一つの典型的な新墓から、その構造と意匠を確認してみよう（写真 21）。

背の部分には、真ん中が高くなった山形の後壁がある。その真ん中に「福」などの文字が刻ま



写真 16 高蓋山光緒年間の墓と睡蓮の装飾

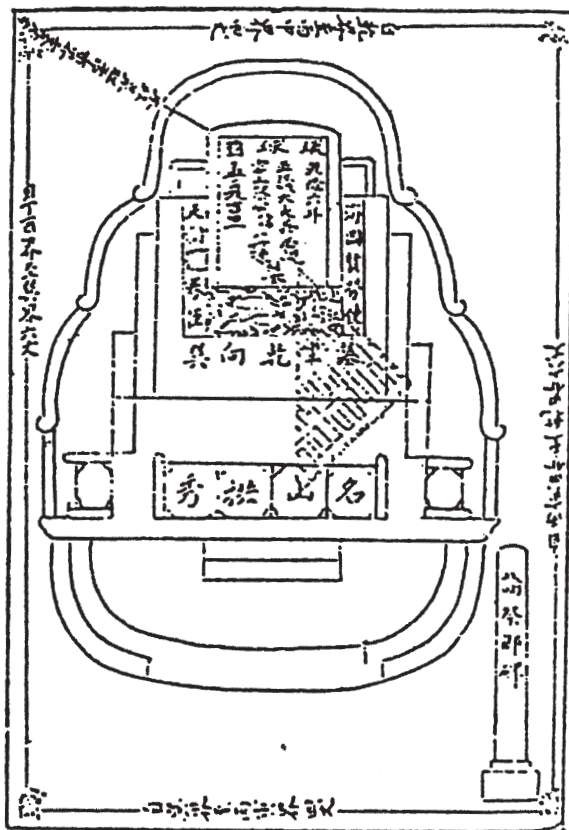


写真 17 高蓋山民国期の墓と仙桃



写真 18 高蓋山の新しい墓と八角竹

図3 蔡氏十二世其棟の墓(乾隆6年造墓・福建)
 [[那覇市史 資料編第1巻6]、312頁所載]



れる。この部分は、伝統的な亀甲墓の后背の馬蹄型の囲みを象徴しているように見える。その前に墓壙の穴があって、その地下に遺骨が安置される。墓壙の上には石の蓋が嵌められるが、その形は平坦な板ではなく、前後左右から中心に向かって斜めに切り取られた入母屋状の形状になっている。伝統的な亀甲は、真中からまるく象られているが、それをデフォルメしたような印象を受ける。後壁から、直角に手前に低い壁が伸びて、墓域を囲っている。その囲いは、前面まできてさらに直角に内側に向いて、前面の壁を作り、墓の正面だけをあけるタイプと(写真20)、左右の壁だけを形成するタイプがある(写真22)。この囲みの壁は、伝統的な亀甲墓の囲みの壁と共通する点がある。それは、中に石柱を置くことである。前囲みのあるタイプは8本、ないタイプは6本の石柱がある。そして、その石柱の上に、いろいろな意匠が置かれることも、共通する。まず、石獅子がある(写真22)。そして、写真21のように方形と球の意匠がある。この形は現代的なデフォルメだ

と考えられる。球は仙桃や睡蓮の変形で、方形は八角竹の変化とも考えられ、この点については確認調査が必要である。

4) 福州における近世墓と現代墓に関する考察

福州における伝統的な墓の形状は、図1や3に示されているように、墓壙は縦に細長い亀甲の形状で、そこに土葬した。その前面に墓碑が立てられる。その部分だけ見ると基本的には北方にも共通する土饅頭型である。ただそれを後ろから囲むように馬蹄形の囲いがある。その囲いの先端部は、丸みを帯びている。それは図1のように1本の馬蹄形の場合もあるし、図3のように左右に2本ずつ繋がれている形状もある。そうすると、結節点から丸の一部がはみ出て、「蕨紋」のような形になる。その突起部は、魔除けと考えられる。

さらに、墓碑の左右から、クランク状に肘掛のような壁が作られる。台湾では「伸手」とも呼ばれるこの意匠は、肘掛のように前に伸びる「如意擺手」だといわれる。これも、福建系の墓の特徴の一つと考えられる。そして、その角に石柱が立てられ、その上に様々な意匠が乗せられる。平敷令治は、台湾桃園の事例から、石柱は近代以前には官人に許された意匠であると述べている[平敷1991: 418]。福州でも、官人であった趙新の墓には、石獅子などの石柱状の意匠があった(写真6)。琉球人墓園の墓には、それらは見られない。

しかし、近代以降は、この石柱上の意匠が民衆の間にも普及していったと考えられる。石柱上の石獅子や石象は避邪の意味があるだろうし、仙桃や睡蓮は富貴を意味している。また、石造りの螺古の装飾(写真4-2と19-2)が乗せられていることがある。田螺の形は螺旋状になっていて、転がるというイメージがある。そこから、それは「財気が転がり入ってくる」という意味がある。



写真 19-1 高蓋山の現代の墓



写真 19-2 螺古の装飾



写真 20 新設の墓園



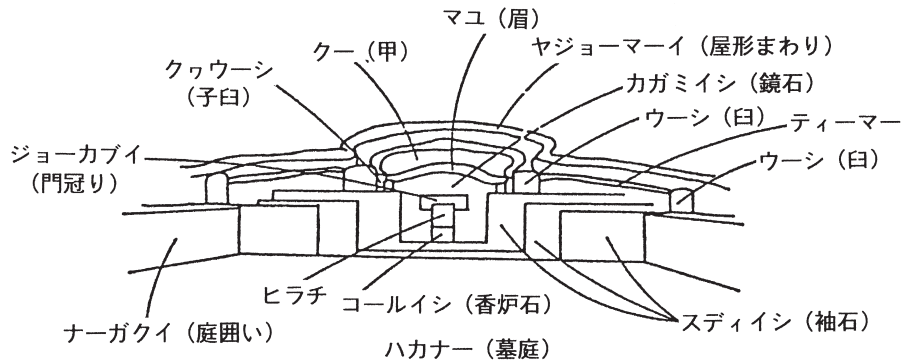
写真 21 墓園の新型墓



写真 22 墓園の新型墓（前囲いのないタイプ）

これらの意匠は、風水とも深く関連していると思われる。墓は、永遠の住み家とも言われ、墓を造営する際に風水を見ることは福建では欠かせない。それは、その墓の位置をマクロに見ることと、ミクロに見ることが重なっている。墓職人である、徐本棟氏が墓地選定に関する風水について概略を話してくれた。これは、マクロな風水である。そして、福建式の墓全体が、ミクロの風水を象徴している。つまり、徐本棟氏が造営した墓の写真8と9を見ると分かりやすい。山の斜面を利用して、墓の中心である亀甲の部分背後から左右に石囲みで囲んでいる。砂手あるいは外屏とも呼ばれ、左が龍砂、右が虎砂とも呼ばれる。後ろに山を背負い、左右も山脈で囲まれる地形は、背後から流れてくる気が集まる、「蔵風」のいい風水の地形である。それを山脈の地形で表すと、背後の主山が高く、そこから左右に伸びる山脈は次第に低くなっていく。どの亀甲墓を見ても、中心の亀甲を囲む囲いは、後ろが高く、左右が次第に低くなっており、マクロな風水の地形を墓自体

図4 亀甲墓の正面図〔平敷 1995：391〕



の形状で表現している。言葉を変えて言うと、遺骨の埋葬されている亀甲を中心にみると、山脈などのマクロな風水環境に囲まれ、さらに墓の構造としての囲みによって作られたミクロな風水環境にも二重の意味で囲まれていると解釈できよう。これは、中国の家屋構造にも似ている⁽⁵⁾。

さらに、庭囲いが墓庭の左右を囲っている。その端に石柱と意匠が置かれる場合がある。そして、墓の入り口に照壁が置かれることもある。写真9を見れば、それは明らかで、その墓はさらに風水池が前庭に作られている。庭囲いの塀にも石柱が立てられ、その上に意匠が乗せられているのが、福建、台湾の墓の特徴と考えられる。平敷令治は、台湾の調査から、石筆柱や石印柱は官人の出世を願って近世には官人に限って立てることが許された〔平敷 1995：390〕としている。それは、福建でも同じであったと考えられるが、近代以降現代に至るまで、民間で普及している。それは、富貴の願望としての仙桃や睡蓮、そして螺古があるが、出世の願望としての筆などの文房具の石柱は見られない。その代わりに、石獅子や石象がある。それは、避邪の意味がある。八角竹も、角が出ているので、避邪の意味があると考えられる。それは、風水による悪い気を避けるための意匠である。

このように、福州では、石柱の意匠は、富貴の願望と風水の避邪の意味をもって、民間で普及してきたと考えられる。それに対して、琉球・沖縄のウーシはどう考えられるのだろうか。

3. 琉球・沖縄の亀甲墓

1) 近世琉球士族の亀甲墓

近世琉球において亀甲墓が造営され始めた時期とその墓については、平敷令治がすでに言及している〔平敷 1995：372-379〕。それは、18世紀においてまず首里士族の間で普及したと考えられ、その基本的な構成要素として、ヤジョーマーイ（屋型まわり）、クー（甲）、マユ（眉）、ウーシ（白）、ティーマー、スディイシ（袖石）をあげている（図4）。そのほとんどは、琉球・沖縄における亀甲墓の構造的要素であるが、ウーシだけはそうではない。ウーシは、墓の建築構造とは異なり、まったくの装飾部分である。ウーシがなくても、亀甲墓は造営可能である。

ウーシに注目して、当時の亀甲墓の構造を確認し

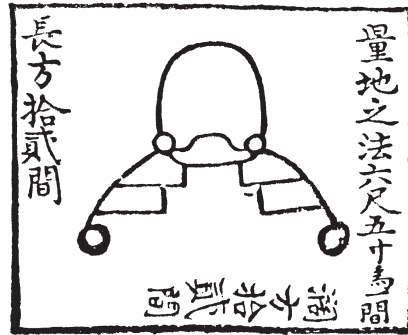


写真23 護佐丸の墓

てみる。時代的に最も古い亀甲墓とされるのが、毛氏の始祖である中城按司護佐丸の亀甲墓である（写真23）。この墓は、康熙二十五年（1686）に改修されたと記録されている。この墓は、前述した基本的な構造をほぼ備えているが、ウーシだけがない。その1年後に造営されたとされているのが、伊江御殿の亀甲墓で、この墓にはウーシも含めて上記の構造すべての要素が備えられている。梁氏（小宗梁邦基）の墓は、家譜にその墓図が描かれている（図5）。乾隆十八年（1753）に造られたその造墓資料によると、亀甲の両脇にウーシが描かれ、さらにそこから左右に張り出すティーマーの端にもウーシが描かれている。この図に記された説明文を見ると、「左右各有一小床」と説明されたものが亀甲に付随したウーシのことで、文章最後の「兩

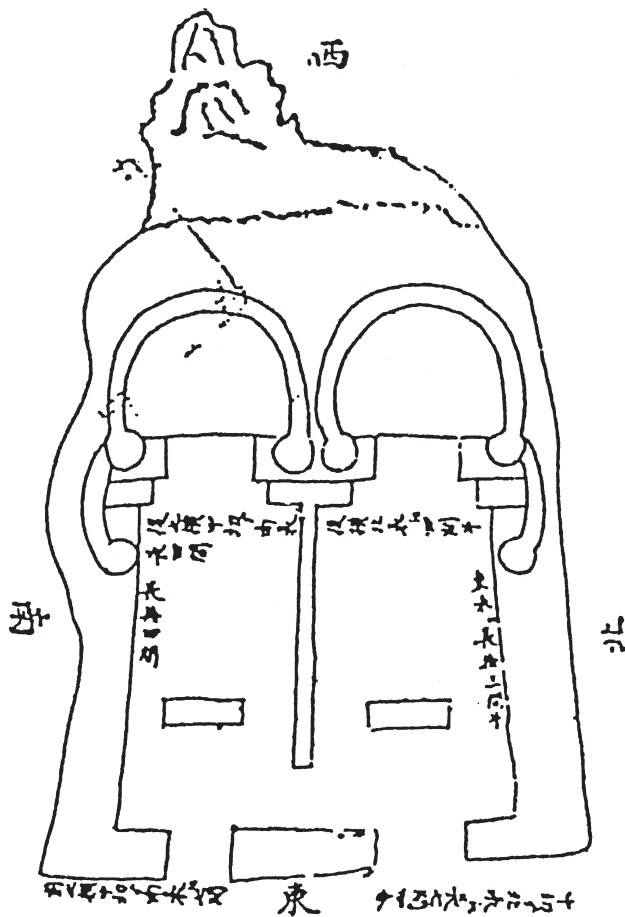
右墓在護道院之後坐辛朝乙外像神龜內長玖尺潤柒尺後壁前有四尺床一座左右各有一小床庭長參丈貳尺伍寸潤壹丈玖尺伍寸兩傍築小石牆

図5 梁氏十一世梁廷権の墓図
[那覇市企画部市史編集室 1980：785]



築開而卒余承遺命至于本年正月起工二月築成擇二十日改葬先祖父母
先父母先兄五位靈柩墓圖開後

図6 鄭姓（小宗鄭士紳）の墓図 [那覇市企画部市史編集室 1980：691]



封 阡
波上兼宮三帽崖墓在鴻勳墓之左坐戌向辰于乾隆五十九年甲寅四月備而買之至道光二年
壬午八月從而新之与鴻勳墓左右相分永為對墓故今記之以為後証



写真 24 ハナ崎墓（自然洞穴墓）

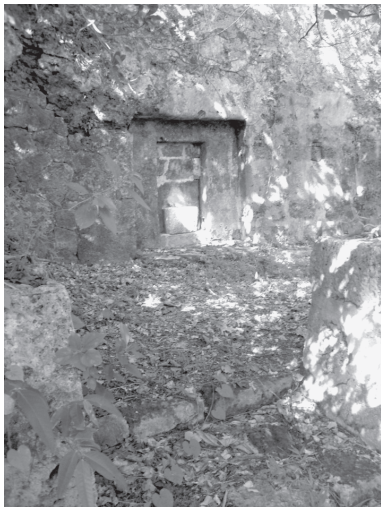


写真 25 小港墓（掘り込み墓）



写真 26 木のさく原墓（初期亀甲墓）

傍築小石墳」と説明されたものがティーマーの端に作られたウーシだと考えられる。このように、二組のウーシがある亀甲墓もある。さらに、鄭姓（小宗鄭士紳）の墓の造墓資料（乾隆五十九年、1794 造営）によると（図 6）、二つの亀甲墓が並んでいるが、それぞれに一組ずつのウーシがあって、ティーマの端につけるウーシは二つの亀甲墓に一組となっている。

護佐丸の亀甲墓にはウーシは見られないが、その他の士族の墓にはウーシがつけられていたことがわかる。

近世における琉球と福州の造墓図を比較してみる。図 1 と 3 は、琉球家譜に描かれてはいるが、福州で造られた亀甲墓の図である。両方とも、亀甲を囲む外堀の両端の端が丸く描かれている。この丸い部分は、琉球人墓園の写真 3 で確認すると、ただの蕨紋のような円形であり、ウーシのような円筒形のものではない。しかし、近世琉球士族の亀甲墓の造墓図である図 5 と 6 をみると、図 1 と 3 に描かれたのと同じ場所に、同じように円が描かれており、それは円筒形のウーシである。このことから考えられるのは、近世士族の亀甲墓は、福州から持ち帰った墓図を参考にして造営された。しかし、円の部分に意匠としてウーシをつけたのは、琉球独特の創意だったと考えられる。

2) 亀甲墓の民間への普及

亀甲墓は、近世琉球においてすでに民間に普及していた。その過程がよくわかるのは、久米島における上江洲家の墓である。

上江洲家の第一墓は、ハナ崎墓と呼ばれ、上江洲家第三代智隆を中心とする模合墓である。17 世紀後期から 18 世紀初期の造営といわれ、白瀬川河口左岸の断崖自然洞穴を利用した洞穴墓である（写真

24）。第二墓は、小港墓と呼ばれ、上江洲家四代智圀夫妻の墓である。1660 年頃智圀の息子智源によって造営され、白瀬川河口右岸の断崖を掘り込んだ掘り抜き墓である（写真 25）。第三墓は、木のさく原墓と呼ばれ、上江洲家五代智源から七代智英までの家墓である。18 世紀初期の造営で、亀甲墓の初期形式である（写真 26）。第四墓は、上江洲家八代智常以下の家墓で、美里川墓と呼ばれる。十代智俊が久米村高嶺里之子親雲上に風水を見てもらい、1831 年に造営した。上江洲家東北方向にある完成型の亀甲墓で（写真 27）、「墓風水図」がある（図 7）。

久米島の上江洲家は、士族ではないが、村役人層の有力な家系であった。したがって、多くの文



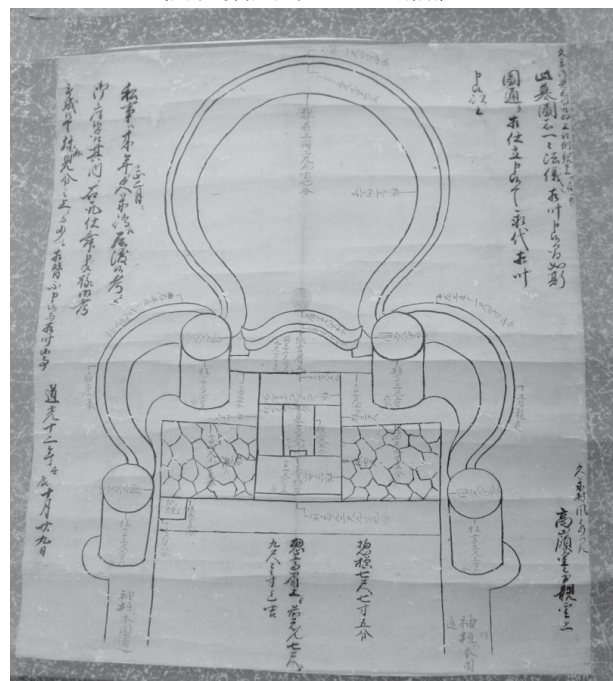
写真 27 美里川墓（ウーシのある亀甲墓）



写真 28 小港松原墓（蔡温の風水見立てによる亀甲墓）

物も残されているし、墓に関しては上江洲家の家を単位とする墓が残されており、近世においても亀甲墓を造営することが可能であった。ただし、上江洲家周辺の上江洲集落と西銘集落の一般の家は、近世においては亀甲墓などを造営することはできず、ヤッチノガマ周辺のフルミーと呼ばれる岩陰利用墓を使用していた〔前田 2001：424〕。上江洲家における 17 世紀の第一墓と第二墓は、伝統的な自然洞穴墓と掘り抜き墓であった。18 世紀初期の第三墓は、亀甲の墓壇があって、その周囲には石組でヤジョーマーイが馬蹄形にめぐらされ、前面は墓口がある。マユ（眉）やウーシのような装飾部分はほとんどない。この時期に造られた仲村渠家の小港松原墓も、亀甲墓の形状をもっている（写真 28）。この墓は、康熙五十五年（1716）に、渡唐途中の末吉親雲上に風水を看てもらって造ったという碑文が残されている。末吉親雲上は、蔡温であり、福州で直接風水を修得して帰国し、琉球国王の国師として国家経営に風水を援用した官僚風水師であった。その墓は、風水を看て小港松原という場所が選定され、「艮山坤向」と方向も風水から見立てられている。この墓は、石組で前面が造られ、マユとスディイシ（袖石）もはっきりとした構造で構成されている。ただし、ウーシはない。その 100 年程後に造られた、上江洲家の美里川墓も、那覇の久米村風水師によって造営されている。上江洲智俊が同治十一（1872）年に記した『家記』には、美里川墓の風水見分について記録されているが、それについては上江洲均と都築晶子の論文に詳しい〔上江洲 1981、都築 1999〕。この墓図（図 7）をみると、明らかに二組のウーシが描かれている。実際に写真 27 で確認すると、確かに二組のウーシが見える。

図 7 久米島上江洲家美里川墓図
（久米島自然文化センター所蔵）



沖縄本島中部の東海岸に浮かぶ離島である津堅島は、古風な葬送儀礼が残されていたことで有名である⁽⁶⁾。この島での墓地の変遷は、明らかである（図 8）。もっとも古い墓地は、集落から離れた北の端にある自然洞穴墓である。そこには、甕に入られた人骨が未だに残されている。戦後、

図8 津堅島の墓地 (① ムラバカ：グショー（後生）：自然洞穴墓・村墓。② トマイバマ（泊浜）：自然洞穴墓・祖先神の墓。③ アガリバル（東原）：この一帯の墓地は、ハカと呼ばれる。大正から昭和初期の造営墓・沖縄風水。④ 西海岸の墓地：戦後の造営墓)



写真 29 津堅島の横穴掘り込み式の亀甲骨墓（大正期）



写真 30 ウーシの置かれた平葺墓（津堅島）

アメリカ軍がそのあたりをブルドーザーで整地した際に、洞穴から甕が引き出されてしまったといわれており、現在その周囲にかなりの甕が放置されている。そのあたりは、現在藪に覆われ、放置されている状態である。大正期になると、一族が集まって門中を形成するようになり、その門中ごとに墓が造られた。場所は、島の中央を東西に延びる段丘を利用してそこを掘り込んで墓壇を造り、その上に亀甲の形を施した掘り込み式の亀甲骨墓である。その典型的なものは、写真 29 に見ることができる。この亀甲骨墓の形状を見ると、基本的な構造はすべて備えており、ウーシも二組置かれている。この地域の亀甲骨墓は、その形状が類似しており、またほとんどがウーシを備えている。この時代には、亀甲骨墓の図面などが墓大工の間に広まっていたのではないかと考えられる。戦後には、集落南側に墓地が移され、そのほとんどが家を単位とした墓になっている。形状も、亀甲骨墓とは限らず、破風墓や平葺墓、家型墓など多様である。ただ、注意すべきは、平葺墓にもかかわらず、ウーシの意匠が乗せられていることである（写真 30）。



写真 31 伊江御殿の亀甲墓 (前田一舟氏撮影)



写真 32 玉陵

4. 考察とまとめ—福州の亀甲墓と琉球・沖縄の亀甲墓の対比—

まず、琉球・沖縄の亀甲墓にあるウーシ（臼）と呼ばれる意匠に注目してみる。

近世琉球に導入された亀甲墓の初期にあたる 17 世紀末から 18 世紀初期のものは、護佐丸の墓、木のさく原墓、小港松原墓であり、いずれもヤジョーマーイ（屋型まわり）、クー（甲）、マユ（眉）、ティーマー、スディイシ（袖石）といった亀甲墓の基本的な構造はもっている。しかし、いずれもウーシ（臼）という意匠はもっていない。ところが、亀甲墓導入初期の 17 世紀後半に造営された伊江御殿の亀甲墓にはウーシがある（写真 31）。造営当初からそれが備えられていたかどうかは今後確認する必要があると思われるが、当時伊江御殿の亀甲墓だけにウーシがあるとすれば、伊江御殿が王族であることを考慮に入れる必要がある。つまり、王族の特殊性と、ウーシの意匠の関連性を考察する必要があると思われる。

第二尚氏王墓は、玉陵である（写真 32）。玉陵は、1501 年に第三代尚真王が、第一代で父親である尚円王のために造営したとされている。その形状は、横穴式の破風墓である。向かって左から東室、中室、西室と 3 つの墓室に分かれている。東室から西室にかけて横一列に高欄が設置されている。その親柱の上に石獅子が 21 体ほどのせられている〔文化財建造物保存技術協会編集 1977〕。親柱の上に石獅子をのせる意匠は、福建・台湾における亀甲墓の伸手柱に石獅子や石象をのせる意匠と類似している。また、その東室と中室の間に、円筒がある。直径が 325 センチメートルもあり、高さは 5 メートルほどもある大きな円筒である。玉陵は、造営後であっても、冊封使や蔡温など多くの専門家によってその風水が何度も看られている。しかし、この円筒がいつ、どのような理由で備えられたかは、今のところ不明である⁽⁷⁾。ただ、口承によると、魔除けのために建てられたとされている。確かに、円筒の上には風水上の魔除けである石獅子が乗せられている。その他に、玉陵左右東塔と西塔の上部にもそれぞれ 1 体ずつの石獅子が置かれている。その台座も、丸みを帯びている。この円筒が、その後の亀甲墓の左右に乗せられるウーシと関連するのではないかという推測のもとで、王族である伊江御殿の亀甲墓をみると、亀甲の手前両端の上部に置かれるウーシは、墓を守る魔除けの機能をもっているように考えられる。

このウーシの意匠は、18 世紀後半以降に琉球士族の間で普及していったと考えられる。3 章（1）で言及したように、近世福州での亀甲墓の墓図に描かれているヤジョーマーイ（屋型まわり）の部分にあたる外屏の両端が、蕨紋のように丸く描かれている。この福州の墓図は、近世の琉球士族の間にはよく知られていたと考えられる。これを参照して、琉球士族は亀甲墓を造営したはずである。そして、琉球家譜に描かれた地元に造営された墓図には、ほぼ同じ場所にウーシが置かれて

いる。近世福州の蕨紋も、近世琉球のウーシもともに魔除けの意味が含まれていた。風水の解釈からも、墓に魔除けが必要であった。したがって、ウーシは、近世福建の亀甲墓の図に描かれた蕨紋という円の意匠をもとに、近世琉球で展開した意匠の創造性だと考えられる。

平敷令治は、近世福建の亀甲墓と近世琉球の亀甲墓の構造を範型として類型化し、「墓庭にヒンブンを立てるのも沖縄における創意」であるとして、双方の類似はコンバージェンスであるとした[平敷 1995: 388]。これは、たいへん重要な指摘で、上に述べたウーシもまさに福州の亀甲墓と琉球の亀甲墓のコンバージェンス（収斂）をとらえることができる。ただし、これは偶然的類似ではなく、根拠に基づいた物質文化の類似とその発展だといえることができる。

それぞれの地域における意匠の発展について、確認しておく。

近世琉球では、士族や有力な地方役人、富裕層で亀甲墓が造られるようになった。久米島上江洲家の第一墓や第二墓のように、洞穴墓や掘り込み墓を利用する場合は、風水は利用できない。しかし、亀甲墓を造る際にはその地形や方角を風水で見ることになる。したがって、亀甲墓の造営は風水師によって行われていたと考えられる。その証拠として、上述の美里川墓の墓図のほかに八重山に残されていた「墳墓新造風水法」の図も、いずれも風水師が関与している⁽⁸⁾。しかし、嘉慶十四年（1809）の「田地奉行規模帳」によると、百姓身分も士族と同じように亀甲墓を造営しても構わないが、装飾や袖石は造ってはならないという決まりがあった。これを、平敷令治は「王府は亀甲墓を士族にふさわしい新しい形式の墓として位置づけ、閩粵の官戸の墓の伸手柱に相当するウーシなどの飾りを百姓の墓から排除したのであろう」[平敷 1995: 390]としている。

しかし、当時風水と関連する福建の石柱の飾りの慣習が琉球にも及んでいたという証拠はない。むしろ、福州では風水に関する意匠として石獅子や石象が、また富貴に関する意匠として仙桃や睡蓮、螺古などが発展して現代に至っている。亀甲墓に付随する意匠の展開は、福州と沖縄ではまったく異なっている。したがって、福州の石柱の飾りと琉球のウーシの直接的な関連も不明であることから、平敷の推論は妥当であるとは言い難い。むしろ、ウーシは玉陵の円筒と関連する琉球の創意であると考え、その後このウーシは王族に関する意匠として、近世の身分制のなかで士族には許されて、百姓身分には禁止されたと解釈するほうが現実的であると考えられる。

その身分制も、明治以降は廃止される。すると、一般民衆も亀甲墓にウーシをつけることは自由になる。こうして、現在に至るまで亀甲墓にはその特徴的な構造の他にウーシの意匠がつくことになっていったと考えられる。それだけでなく、ウーシが亀甲墓以外の墓型にも付随されるようになったのは、明治後期から大正にかけて沖縄で流布するようになった墓の母体回帰説と関連すると予想されるが[前田 2011: 47]、それについては別稿に譲りたい。

近世において、確かに福州の亀甲墓の形状は、墓図などを通して琉球に導入された。また、その墓図などを利用して琉球で亀甲墓を造営する際には、久米村の風水師が関与していた。しかし、「埋まる葬法」と「埋めない葬法」という葬法の違いや個人墓か集団墓かという所有や使用法の違いなどで、亀甲墓の内部構造が異なることは前著で述べた[小熊 2011]。本稿では、外部構造の意匠について福州と琉球・沖縄の違いを検討した。福州の亀甲墓と琉球・沖縄の亀甲墓は、平敷令治の言うように、まさに墓という物質文化のコンバージェンス（収斂）のよい例である。その基本形が福州から琉球に導入されたことは確かであるが、その後の両者の歴史的展開を立体的に比較することによって、その相違がどこにあるかを検討することは、その根底にある両文化における民俗的思考の違いを明らかにすることに通ずることを示すことができたと考える。

注

- (1) 墓形態の分類については、いくつかの分類法が提示されている。[前田 2011: 23-27] に沖縄の墓制研究および墓の分類法について先行研究を詳しく整理している。しかし、本稿では亀甲墓の展開について検討することを目的としているので、その分類については言及しない。
- (2) 明の初めは、海外貿易を管理する福建市舶司が泉州におかれていたので、琉球船もそこに渡航した。しかし、1472年にそれが泉州から福州に移され、以後琉球船は福州へ渡った。
- (3) 国際常民文化研究機構における角南班のプロジェクト調査として、2012年2月28日から3月4日まで、福建省福州市およびその周辺で墓調査を行った際に、趙新の墓も実地調査した。
- (4) [那覇市企画部市史編集室 1980 312頁] 掲載。乾隆六年(1741)に福建で造墓。
- (5) [渡邊 1994: 231-234] によると、台湾の家屋の構造が、中心の正庁がある棟の屋根が高く、そこから左右に伸びる護龍の屋根が次第に低くなるように作られていて、それは風水環境と同じ構造を表していると指摘されている。
- (6) [伊波普猷 1927 「南島古代の葬儀」『民族』2-5・6] に、津堅島の葬儀について触れられている。
- (7) 閃緑岩製の円塔上にある石獅子も、微粒子砂岩製の高欄親柱上の石獅子も、1501年に造られたと考えられている[文化財建造物保存技術協会編集 1977: 35]。
- (8) [平敷 1995: 400-401] に記されているように、この図は、玉木順彦氏から平敷氏に提供されたもので、久米村風水見高嶺里主親雲上の作図を道光十七年(1837)に写したと記されている。

参考文献

- 上江洲均 1981 「久米島上江洲親雲上の『家記』」『沖縄県立博物館紀要』7。
- 小川徹 1968 「沖縄における若干の墓型とその年代」『法政大学文学部紀要』第13号。
- 小熊誠 2011 「沖縄と福建における亀甲墓をめぐる比較研究—沖縄における需要と展開を中心として—」国際常民文化研究機構『国際シンポジウム報告書Ⅱ “モノ” 語り—民具・物質文化からみる人類文化—』。
- 沖縄県地域史協議会編 1989 『シンポジウム南島の墓—沖縄の葬制・墓制—』沖縄出版。
- 徐恭生(西里喜行・上里賢一共訳) 1991 『中国・琉球交流史』ひるぎ社。
- 高良倉吉 1986 『続おきなわ歴史物語』ひるぎ社。
- 都築晶子 1999 「久米島の風水文書をめぐって—方位論と形勢論—」『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』(科学研究費成果報告書、研究代表者横山俊夫)。
- 那覇市企画部市史編集室 1980 『那覇市史 資料編第1巻6 家譜資料二(上下)』。
- 同 1982 『那覇市史 資料編第1巻7 家譜資料三』。
- 文化財建造物保存技術協会編集 1977 『重要文化財 玉陵後原修理工事報告書』
- 前田一舟 2001 「上江洲・西銘における葬制と祖先祭祀」沖縄県立埋蔵文化財センター『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』。
- 同 2011 「墓の形態とその変遷—沖縄本島中部・屋慶名の事例—」『沖縄国際大学社会文化研究』12-2。
- 平敷令治 1995 『沖縄の祖先祭祀』第一書房。
- 渡邊欣雄 1994 『風水 気の景観地理学』人文書院。